

防災や人命救助の現場を担う
使命感あるパイロットを輩出します

「高度千メートル、時速百キロをキープ」「了解」。ヘリパイロットの実習訓練が行われているのは、茨城県下妻市の上空。操縦するのは、帝京大学理工学部の航空宇宙工学科ヘリパイロットコースで学ぶ学生たち。風向きなど状況が刻々と変化するなか、いかに機体を正確にコントロールするかが問われる、場周経路飛行と呼ばれる実習中です。レオナルド・ダ・ヴィンチの有名な素描からも思い起こされる通り、人間が空を飛びたいという思いを純粹に形にしたようなヘリコプターという存在。その最大の特徴は、空中で停止するホバリングであり、それができるからこそ、防災や人命救助、山岳への物資輸送、報道といったミッションが可能になる。そんな魅力を語ってくれたのは、自身もヘリパイロットとして活躍した畝本宜尹教授。「旅客機は高度一万メートル前後ですが、ヘリコプターはだいたいその十分の一くらい下をゆっくり飛んでいます。だから見える景色もまったく違う。紅葉の十和田湖上空なんて本当に素晴らしいですよ。鳥のように自由に飛ぶ感覚。ヘリは有視界飛行といって、計器だけに頼らず、広い視界から得る情報をフル活用して操縦します。飛

ぶことの醍醐味の原点ですね」。空から帰ってきたばかりの学生に声をかけると、「今日は上空が澄んでいて、東京方面にはスカイツリーがくっきり見えまして」と元気よく答えてくれました。ヘリパイロットコースは2010年からスタートした新しいコースで、四年制大学としては初の試み。その第一期生である彼らも今回で11時間目の飛行となり、1年生の後期では教官を伴わない単独飛行が最大の目標。その後、3年生までに事業用ライセンスを取得し、4年次にはドクターヘリなど、より実践的な現場を勉強するカリキュラムが用意されています。そもそも帝京大学がヘリパイロットコースを開設したのは、若い人材が不足しているという業界の事情を踏まえた、「若い人たちにチャンスを作ろう」という大きな思いから。ヘリパイロットの仕事は、災害救助などの過酷な現場でも、ひとりの力であらゆる問題に対処しなければならぬ世界。ギリギリのところでは、がんばる、タフなファイティングスピリットが必要な職業です。だからこそその厳しい実習。それでも若い彼らの心の真ん中にあるぶれない気持ち、空を飛びたいという純粋な思いが、すべてを支えています。「とにかく空はいいです」と語る学生たちの笑顔に迷いはありません。



feel TEIKYO ft
あなたにつながる帝京大学 撮影・正田真弘